

平和文化研究 第36-37集 (2016年度)

## 被団協とわたし

—石田忠「総括表」にふれて

高橋 眞司

前・長崎大学教授、社会学博士

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

# 被団協とわたし

## —石田忠「総括表」にふれて

高橋 眞司

前・長崎大学教授、社会学博士

### 目次

まえがき

1	被災協・被団協とわたし	10
2	石田忠「総括表」にふれて	12
	注	15
	付録 『被爆者の死』英語版への序文	19

### まえがき

「日本被団協」(日本原水爆被害者団体協議会)は、ビキニ水爆実験の翌々年、1956年8月10日、長崎市国際文化会館において結成大会を開催し、感動的な「世界への挨拶」を発表した。折から長崎市(東高体育館)で開かれていた第2回「原水爆禁止世界大会」の2日目のことであった。歳月は流れて、2016年8月10日、日本被団協は結成60周年を迎え、同年10月12日、東京で60周年の祝賀会を催した。私は「日本被団協結成60周年へのメッセージ集」に小文を寄稿した。

本稿は、短いメッセージを元の原稿にもどし、それに多少手をくわえ、若い世代と外国の友人たちのために、長崎に関してややくわしい注を付したものである。(以下、敬称略)

1 日本のヒバクシャ<sup>(1)</sup>と日本被団協は、戦後日本のみならず、戦後世界の欠くべからざる存在であり、未来にむかって核なき世界を創造するうえで不可欠の象徴的存在である。かつて私

は、地元の新聞社の求めに応じて、被団協のノーベル平和賞受賞のニュースに備えて、祝辞をよせたことがある。その記事は印刷に付されることはなかったが、被団協の存在と活動は、ノーベル平和賞をなんと受賞してもつきることがないほど偉大だ、と言いたい。

わたしが長崎に赴任したのは、もう半世紀近くもまえ、1973年であった。

1977年に「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情」に関するNGO被爆問題・国際シンポジウム(77シンポ)が、東京・広島・長崎で開催された。被爆問題を国際的環視のもとに置いた(したがって、以後、被爆問題が国内的にも国際的にも学問的対象となった)この77シンポの重要性は、とくに若い世代に語り伝えておかねばならないであろう<sup>(2)</sup>。

1982年には、SSD-II(第二回国連軍縮特別総会)がニューヨークの国連本部で開催された。「被爆者の現在」<sup>(3)</sup>(77シンポのさい長崎で行われた



被爆者調査)を報告するために、わたしは被団協代表団の一員に加えられた。ニューヨークでは、「仙ちゃん」こと山口仙二と同室を許されて兄弟の交わりを結んだ。SSD-IIの本会議で、本島等・長崎市長は「長崎は、永遠に、地球上における最後の被爆地でなければならない」と演説を結んだ。山口仙二は、反原爆の世論と被団協を代表して、人間として最大限の威厳をこめて「ノーモア・ヒバクシャ!」を叫んだ。長崎から同道した秋月辰一郎医師は「核兵器の道義性と合法性に関する国際シンポジウム」で“その時”医学は無力である」という重要な講演をした<sup>(4)</sup>。わたしは「社会学者と核戦争」という大きな集会で、R.J. リフトン教授に前後して登壇し講演した。主催者からは思いがけずトロフィーとして真鍮製の「モービウス」(台座つきメビウスの輪)を授与された。この「モービウス」(図1)は、集会の標語”Only one side—Humanity”(ただ一つの立場—それは人類の立場だ)と相まって、東西間の分断と冷戦を終わらせ、核の応酬を未然にふせぐ知恵を視覚化したものであった<sup>(5)</sup>。



図1 モービウス (Moebius, 22.5×14.5cm)

77 シンポと SSD-II の二つの体験は、わたしにと

ってライフワーク《長崎にあって哲学する》三部作にとりくむきっかけとなった。被爆者との親しい交わりと被爆問題への科学的アプローチなくして、1985年(被爆40周年)の「長崎原爆の思想化をめぐる—永井隆“浦上燔祭説”批判」<sup>(6)</sup>はありえなかったであろう。

日本被団協の組織と運動は、自らのうちに(そのごく一部を挙げるだけでも)丸木位里・俊のような画家、峠三吉、原民喜、福田須磨子、林京子のような詩人や小説家、森瀧市郎のような哲学者、秋月辰一郎・肥田舜太郎のような医師を擁しつつ、大江健三郎や山田洋次、吉永小百合ら日本を代表する作家や映画人をはじめとして、石田忠のような「<原爆>と人間」の究明に生涯を捧げた社会学者など、さまざまな個人、団体、組織と協働して、原爆被害の反人間性を訴え、核兵器廃絶の運動を展開してきた。

さらに、被団協は、日弁連(日本弁護士連合会)と地元弁護士会の支援をうけて、全国各地で法廷闘争をくり広げてきた。長崎原爆松谷訴訟(1988年提訴)においては、長崎地裁で「後障害等による苦しみを感している一個の全体的な障害者という統合的視点は不可欠なものとしてきつとこれを確保し…なければならない」という江口寛志裁判長の画期的な判決(1993年)を引き出し、福岡高裁、最高裁にいたるまで完全勝利をおさめた[ただし、引用文中のルビは高橋]。障害と疾病の、被爆との関連を否定して、原爆被害を矮小化する日本政府の姿勢を根本からただし、国家補償の立場に立った「被爆者援護法」の制定をせまる法廷闘争は、近年の「ノーモア・ヒバクシャ訴訟」においても受けつがれている。

こうして、日本被団協の組織と運動は、この60年のあいだ、反公害闘争、反基地闘争、反原発運動などとともに、日本の平和運動、ならびに基本的人権といかなる状況にあらうともけっして侵すことのできない「人間の尊厳」を守るたたかい、の中核に位置してきたと言っている。

2 今、わたしは、日本被団協は多様な個性と豊かな資質をもった人々からなる組織であることを述べたが、いまひとつ、その多様性のなかに一定の秩序が存在することを指摘したい。

国(厚生省公衆衛生局)の被爆者調査は過去に、1965 年、1975 年、そして 1985 年の 3 度実施された。しかし、85 年の死没者調査をのぞけば、いずれも被爆者の現状把握に関する調査項目に終始していて、厚生省調査は原爆投下と原爆被害の非人道性を明らかにするものとはなっていない。この点は国の被爆者調査に接するたびに痛感するところである。

国(厚生省)の被爆者調査に対抗する民間の調査としては、被団協が被爆 40 周年の 1985 年 11 月 - 1986 年 3 月におこなった「原爆被害者調査」が最も大規模かつ重要なものである。その調査の自由回答記述欄の証言を編集したもの<sup>(7)</sup>に、日本被団協(編)『ヒロシマ・ナガサキ 死と生の証言』

と生の証言』(岩波書店、2005 年)がある。

他方、「社会調査家」石田忠は、濱谷正晴や栗原淑江ら「原人会」(一橋大学「<原爆>と人間」研究会)の物心両面の支援をうけて、おびたしい数の統計表を作成した。石田忠はその頂点に立つ一枚の統計表を「総括表」<sup>(8)</sup>と名づけた。

「総括表」は、被爆したために(「原爆報道」も含めて)「死の恐怖」を感じたことがあるか、被爆者であるために「不安」を感じたことがあるか、被爆したために「つらかったこと」として「病気がちになった」、「健康にいつも不安」、「出産や子どもの健康に不安」があったか、あの日の出来事が「心の傷あと」になっているかどうか、という選択肢において、被爆者をその原爆被害の多寡に応じて 0 から 7 まで八つの層にわけた。そして、それを被爆者の「生きる支え」—「安定した生活をきづくこと」、「家族に囲まれてくらすこと」、「仕事、趣味、宗教に生きること」から、「被爆の証人として語りつぐこと」、「援護法制定の日まで生きぬくこと」、

表 1 石田忠「総括表」

表 1-1 総括表

被害層	総数	生の喪失体験のある者	国の責任を問う者	類型 A・B	類型 E・F
VII	200 ( 100.0 )	71%	82%	87%	6%
VI	502 ( 100.0 )	58%	70%	81%	10%
V	832 ( 100.0 )	45%	58%	72%	16%
IV	1223 ( 100.0 )	35%	45%	61%	24%
III	1304 ( 100.0 )	23%	37%	48%	34%
II	1117 ( 100.0 )	17%	32%	40%	45%
I	889 ( 100.0 )	11%	25%	27%	58%
0	677 ( 100.0 )	4%	19%	21%	64%
計	6744 ( 100.0 )	27%	41%	50%	35%
IV~VII	2757 ( 100.0 )	45%	56%	70%	18%
0~III	3987 ( 100.0 )	16%	30%	37%	47%

(出典) 一橋大学<原爆と人間>研究会(編集発行)『統計集<原爆体験の思想化>—日本被団協「原爆被害者調査 1985」分析』第 1 巻、1 ページ、2004 年。

(新日本出版会、1994 年)があり、調査全体の詳細な分析として濱谷正晴『原爆体験—6744 人・死

「核兵器をこの地球上からなくすために生きること」(反原爆の 3 項目)など—とクロスさせたもので

ある。

図2 石田忠「総括表」のレーダーチャート図

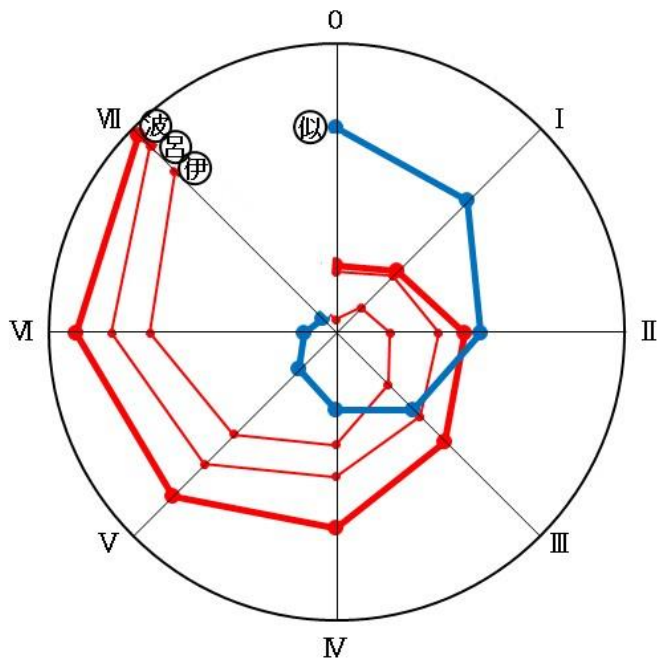


図2 凡例

ローマ数字（時計文字 0～VII）は被害の層；なお、中心は 0%；円周は 100%；パーセンテージ（%）を示すアラビア数字は本図では省く。表 1 参照。

①伊：生きる意欲の喪失体験のある者

②似：国の責任を問うている者

③波：類型 A・B 型—生きる目的に反原爆のすべて（3 項目）を含めている者（A）；いずれか一つを含めている者（B）

④伊：類型 E・F 型—今の生きる意欲が己れ中心の小宇宙の者（E）；生きるはりあい、支えがとくにない者（F）

（図案）高橋眞司 （作図）竹下哲史

この「総括表」によれば、原爆体験の重く深い層(被害が多重で、生きる意欲を奪われるほどの体験をした層)になればなるほど、「反原爆」すなわち被爆の証人として「証言をする」、援護法制定や核兵器の廃絶の日まで生き抜くと答えたものが多くなっている。石田忠はそこに「極めて規則的に」という言葉をつけ加える。原爆被害が少ない層においては、それとは逆に「生きる支え」として、家族に囲まれて生きる、仕事や趣味に生きる、あるいは「生きる支え」はとくにない、などをあげている。石田忠の「総括表」によれば、原爆体験の深重なことと「生きる支え」のあいだには厳密な相関性がある。そこには一糸の乱れもない「規則性」が見出されたのであった。

こうして、個性も職業も思想も、多種多様な人びとからなる日本被団協の組織と運動のうちに、見事なまでの規則性と法則性を見出した石田忠の社会調査を、わたしは、オーギュスト・コントが創始した「社会のさまざまな問題を真に実証的な方法でとり扱う一つの社会物理学(*la physique sociale*)」、すなわち、「社会学(*la sociologie*)」<sup>(9)</sup>の豊かな学問的伝統につらなるもの、と高く評価するのである。

ところで、石田忠が「原人会」の助けを得て 1500 枚余の統計表を作成したのは、社会調査のプロフェッショナルとしては、ある意味で必然的な営みであったと言えよう。それを承知のうえで、なおわたくしの心の奥に秘められた真実を吐露すれば、私はそれが不肖の弟子であるわたくしに向けられた応答でもあった、と信じているのである。

石田忠は、1988 年、日本被団協主催の第 1 回「被爆者問題研究会」で「地獄の復元—「罪意識」を中心として」を報告したとき、被爆者調査の結果を仔細に分析しているが、いまだ「総括表」には到達していない。石田忠は 1990 年ごろから「総括表」について言及しはじめていたのであったが<sup>(10)</sup>、かれが被団協「被爆者問題研究会」の場で「総括表」

とその意味するところについて決定的な表現を与えたのは、被爆者調査の実施からちょうど 10 年目の第 5 回「被爆者問題研究会」(1994 年 4 月開催)であった<sup>(11)</sup>。

その間、石田忠の「総括表」について知る前後の 1990 年に、わたしは恩師・石田忠にむかって、文書で「いくつかの質問」、疑義を提出していた。とくに「家族に囲まれてくらすこと」は「原爆によって破壊された生命と幸福の象徴としての《団欒》を意味するとすれば、ここにも反原爆の意思は濃厚にこめられていると言わねばならない」云々、と<sup>(12)</sup>。

しかし、わたくしのこの疑義は実証的な分析を経ない、一つの憶測、臆見にすぎないこと<sup>(13)</sup>が石田忠の「総括表」によって完膚なきまでに明らかにされたのであった。石田忠の 1550 表を背景にもった一枚の「総括表」は、不肖の弟子にたいする石田忠の、人間的には誠実この上ない、しかし学問的には一点の曇りも残さぬ、峻厳な応答であったと、わたくしは信じているのである。

こうして、石田忠は「総括表」をふくむ 1551 枚の「統計集」<sup>(14)</sup>の分析をつうじて、被爆者であることを共通点としてもつ以外には、多種多様なひとびとの集団である被団協が、核兵器の廃絶と被爆者援護法の即時制定をもとめて、集団討議をかさね、国の内外で血のにじむような運動を展開した挙句、アンモナイトにも、水晶にも、真珠にも、ダイヤモンドにも比すべき、揺るぎない法則性と美しい秩序(図 2 参照)とをもった集団であることを見事に立証したのである<sup>(15)</sup>。

日本被団協と長崎被災協に属する被爆者との交わり、そして彼らとともに同時代を歩みつけ、その苦難により添い、喜びを分かちあってきた人びととの交わりは、私の人生の方向性を定め、わたくしにいつも深い感動と感謝の念を呼びおこすのである。

【注】 以下の注における二、三の書物のうちの短剣符/ダガー (†) は筆者による論稿の寄稿を、双剣符/ダブルダガー (‡) は編著を意味する。

(1) 厚生労働省の発表によれば、「被爆者健康手帳」をもつ人の数は、ピーク時の 37 万 2264 人 (1981 年 3 月末) から減少しつづけて、2014 年 3 月末には 20 万人を割り込んで、19 万 2719 人となった。2016 年 3 月末の時点で、被爆者数 (被爆者健康手帳所持者数) 17 万 4080 人、平均年齢 80.86 歳、となっている。

(2) 「被爆の実相と被爆者の実情」に関する NGO 被爆問題国際シンポジウム (77 シンポ) には、英文と和文の優れた報告書がある。Japan National Preparatory Committee (ed.), *A Call from Hibakusha of Hiroshima and Nagasaki: Proceedings of International Symposium on the Damage and After-Effects of the Atomic Bombing of Hiroshima and Nagasaki*. Asahi Evening News, 1977; 日本準備委員会 (編集) 『被爆の実相と被爆者の実情—1977 NGO 被爆問題シンポジウム報告書』朝日イブニングニュース社、1978 年。

なお、広島・長崎で原爆が何をもたらしたか、に関する総合的な研究として、広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会 (編) 『広島・長崎の原爆災害』(岩波書店、1979 年) がある。本書は、広島市長および長崎市長が、1976 年、国連事務総長に提出した『核兵器の廃絶と全面軍縮のために—国連事務総長への要請』に端を発して、飯島宗一、今堀誠二、具島兼三郎の三名の編集委員の責任においてまとめられたものである。そこには 77 シンポの英文・和文の成果も取り入れられており、以下の英語版をつうじて、国際的にも評価が高い。 *Hiroshima and Nagasaki: The Physical, Medical, and Social Effects of the*

*Atomic Bombings*, edited by the Committee for the Compilation of Materials on Damage caused by the Atomic Bombs in Hiroshima and Nagasaki. Tokyo: Iwanami Shoten, 1981.

ただし、NGO77 シンポの報告書『被爆の実相と被爆者の実情』には、原爆被害者への人間的共感ならびに被爆者運動への共感を、国連軍縮特別総会 SSD-I・II・III に反映させて、核軍縮の国際的気運を高めようとする国際社会の熱気が籠められていた。それに対して、岩波版『広島・長崎の原爆災害』は、「原爆被害」を自然災害とも通底する「原爆災害」と呼んで「その客観的分析と総合的な叙述」を意図したところに、それぞれの特徴とそこに微妙な差異のあることがうかがわれる。

また、NGO77 シンポに際して、長崎では、『長崎の証言』誌の編集に携わってきた鎌田定夫らを中心に、NGO 被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会 (編集・発行) 『長崎原爆被害総合報告・1977 原爆被害の実相—長崎レポート』† (1977 年) が刊行された。日本被団協の専門委員であった山手茂は、本書について「歴大で充実した報告書が、今年 3 月 14 日に長崎準備委員会が発足してから僅か 4 ヶ月半の間に、立派な単行本[B5 版、312 ページ]として完成されたことは、驚嘆に値する。……われわれは本報告書の内容から教えられることが多いのはもちろんであるが、この作成過程からも多くを学ばなければならない」と書評を寄せている。『日本の科学者』1977 年 11 月号; 長崎の証言の会『長崎の証言ニュース』No.40、1977 年 11 月、に転載。

(3) 長崎原普協 (長崎「原爆問題」研究普及協議会) 編集・発行『被爆者の現在—長崎の被爆者調査のまとめ』(1981 年) 増補改訂版‡、1984 年。

ところで、1981 年 7 月、東京で「原爆の非人道性と国の戦争責任を裁く」国民法廷運動の



モデル法廷が開かれた。つづいて、同年 8 月 8 日、長崎で国民法廷が開かれた。長崎国民法廷はその後の「全国的な広がり」の端緒となったといわれるもので、池田早苗、熊和子の圧倒的な証言、石田忠裁判長の真に人間的な審判文とによって、会場は熱気と感動に包まれた。わたしは、『被爆者の現在』に基づいて、「被爆者一集団としての訴えと要求」について証言した。当夜のわたしの証言は、高橋眞司『長崎にあって哲学する・完一 3・11 後の平和責任』(北樹出版、2015 年) 55-60 ページ、に収録されている。

(4) 1982 年の SSD-II とその関連行事に長崎から参加した人々のうち、本島等、山口仙二、下平作江、渡辺千恵子、秋月辰一郎、高橋眞司のアメリカ合衆国での英文スピーチを収めたものに次のものがある。 *Appeals from Nagasaki*. Edited by Shinji Takahashi, circulated in manuscript since 1985 and published by “Nagasaki Association for Research and Dissemination of Atomic Bomb Survivors’ Problems” in 1991.

なお、これまでに開催された「国連軍縮特別総会」(SSD) 全 3 回(1978, 1982, 1988)に長崎から参加したひとびとの、現地での報告をあつめたものに、長崎原普協(編集・発行)『SSD-I・II・III 長崎からの訴え』‡(1993 年)がある。

(5) 「社会科学者と核戦争」集会における報告の経緯を、わたしは「ナガサキからニューヨークへ—長崎の被爆者調査を報告して」と題して書きとどめた。初出は、広島・長崎の証言の会『季刊 ヒロシマ・ナガサキの証言』第 3 号、1982 年夏。高橋眞司『続・長崎にあって哲学する—原爆死から平和責任へ』(北樹出版、2004 年)に収録。

77 シンポの時点で、すなわち、ヒロシマ・ナガサキの原爆投下から 32 年後の時点で、なお原爆被害は持続しており、ヒバクシャは「病気と貧困の悪循環」に捉えられ、孤独や生活苦な

ど老齢化の諸困難のうちに沈殿せしめられている、という報告の趣旨をまとめて、『ブレイン・オブ・アトミック・サイエンティスト』誌に寄稿した。Shinji Takahashi, “Relief for the Hibakusha”, *Bulletin of the Atomic Scientists*, Vol. 40-8, October, 1984, pp. 25-26. この報告の趣旨は、以下の URL で読むことができる。

URL:

<http://dx.doi.org/10.1080/00963402.1984.11459268>

なお、『反核と戦争責任—「被害者」日本と「加害者」日本』(三一書房、1982 年)の著者・岩松繁俊(長崎大学教授)は、被爆者として原爆投下を批判するだけでなく、日本の戦争責任、ならびに軍国主義の復活を批判した重厚な論文を上記 *Bulletin* 誌に寄稿している。Shigetoshi Iwamatsu, A Perspective on the War Crimes. *Bulletin of the Atomic Scientists*. Vol. 38-2, 1982, pp. 29-32.

URL:

<http://dx.doi.org/10.1080/00963402.1982.11455700>

岩松繁俊は、イギリスの哲学者で反核運動の指導者、バートランド・ラッセルとの往復書簡でも知られる。

(6) 被爆 40 周年の 1985 年、わたしは熊本で開催された社会思想史学会で、「長崎原爆の思想化をめぐって—永井隆から秋月辰一郎へ」と題して報告した。初出は社会思想史学会年報『社会思想史研究』10 号、1986 年。33—43 ページ。のち、高橋眞司『長崎にあって哲学する—核時代の死と生』(1994 年) 193—206 ページ、に収録。

なお、永井隆とかれ独特の思想「浦上燔祭説」にふれた文献は数多くあるが、それらを整序しながら「浦上の原爆の語り」の変容を実証的に丁寧考察したものとして、四條知恵『浦上の原爆の語り—永井隆からローマ教皇へ』(未来社、2015 年)がある。

また、3・11 後の、現在の新しい文脈で、永



井隆と「浦上燔祭説」の意味を批判的に吟味したものに、山口研一郎『国策と犠牲—原爆・原発そして現代医療のゆくえ』（社会評論社、2014年、増補改訂版、2016年）がある。

(7) 本書に先行するものに、日本原水爆被害者団体協議会が編集・発行した「日本被団協 原爆被害者調査資料集 I、II」として『「あの日」の証言（その1）』（1988年刊行）、『「あの日」の証言（その2）』（1989年）があり、同資料集 III、IVとして、『被爆者の死（その1）—「あの日」から昭和20年末まで』（1989年）、『被爆者の死（その2）—「昭和21年からの40年』（1989年）がある。

これら4冊の資料集を精読して、わたしは「被爆体験の概念的構成」（社会思想史学会報告、1990年）および「被爆者の死と生」（日本被団協「第4回被爆者問題研究会」1993年）の2編を発表した。いずれも拙著『長崎にあって哲学する』（1994年）に収録。

あわせて、英語版も日本被団協から刊行された。*The Witness of Those Days: HIROSHIMA & NAGASAKI*. (2 Vols, 1989)には「人間的なこころの叫びを共にしよう」と題して、石田忠が熱のこもった「序文」を書き、作家・大江健三郎が「世界中の同胞へのメッセージ」を寄せた。また、*The Deaths of Hibakusha*. (2 Vols, 1991)への「序文」は、「核なき世界へ」(Toward a Nuclear-Free World)と題して高橋眞司が書き（本稿「付録」Appendix.参照）、簡潔ではあるがすぐれた「推薦」のことばをアンドルー・ヒューズが寄せた。

(8) 石田忠「原爆体験の思想化—被団協調査・分析」、第5回「被爆者問題研究会」（1994年4月）にて発表。日本被団協『被爆者問題研究』第5号、1995年、33-65ページ。

(9) Auguste Comte, *Leçons de Sociologie : Cours de philosophie positive. Leçons 47 à 51*. GF-Flammarion, Quarante-neuvième Leçon, pp. 192-

193.

なお、“sociologie”（社会学）の語は、ラテン語の仲間、同胞を意味する“socius”とギリシア語の言葉、理性、推理を意味する“λόγος”とを結びあわせた、A・コントの独創にかかる造語である。

(10) 石田忠「原爆は人間に何をしたか」、日本平和教育研究協議会編『平和教育』39号、1990年31-38ページ；同「原爆死をどう考えるか」『科学と思想』86号、1992年、98-105ページ、など。

(11) 前出、注（8）におなじ。石田忠の論文「原爆体験の思想化—被団協調査・分析」（『被爆者問題研究』第5号、1995年）は、石田の「反原爆論集」2巻（『原爆体験の思想化』及び『原爆被害者援護法』未来社、1986年）以降の著述中で最高の到達点であるのみならず、かれの『統計集<原爆体験の思想化>』全7巻+別巻（後出、注14）の読解のために不可欠の論文である。

なお、これは師弟間の私的領域に属することかもしれないが、石田忠は、1994年秋、長崎の秋祭り「くんち」の余韻も収まったころ、人を介して、翌年の春『被爆者問題研究』第5号に掲載される予定のこの論文を「高橋君にはぜひ目を通していただきたい」との伝言と共に、恵与されたことをここに書き添えておきたい。

(12) 高橋眞司「被爆者問題研究の新段階」、長崎総合科学大学・長崎平和文化研究所『平和文化研究』第13集、1990年；拙著『長崎にあって哲学する—核時代の死と生』（北樹出版、1994年）所収

(13) ここは、古典ギリシア哲学の「<sup>エピステーメー</sup>学的認識」

（<sup>ドクサ</sup>ἐπιστήμη）と「臆説」（δόξα）の区別のうえに立っている。Cf. *Platonis Opera recognovit Ioannes Burnet*, Oxford Classical Texts, Tomus IV,

ΠΟΛΙΤΕΙΑ, E, 477b; Plato, *The Republic*, Book V, 477b: Loeb Classical Library. Plato V, *Republic*, Vol. I, pp. 522-523. なお、山本光雄は「認識」に「臆見」を対置し (『世界の大思想 I, プラトン『国家』184 ページ、河出書房新社、1965 年)、藤沢令夫は「認識」に「思わく」を対置している (プラトン全集第 11 巻、『国家』404-405 ページ、岩波書店、1976 年)。

(14) 一橋大学<原爆と人間>研究会 (編集発行)『統計集<原爆体験の思想化> 一日本被団協「原爆被害者調査 1985」分析』全 7 巻+別巻、2004 年。集計・作表は沼崎保宏。

石田忠『統計集』全 7 巻+別巻のセットは、国立情報学研究所 ”CiNii” (大学図書館の本をさがす) によれば、一橋大学、広島市立大学をはじめ、全国 8 大学の図書館に所蔵されている。

なお、石田忠の米寿を記念して開かれた講義録『統計集<原爆体験の思想化>について』(沓石会編集・発行、2004 年) は、基本仮説「原爆体験は被爆者の思想的営為を活性化し、それに方向を与える働きをするのでないか」の提示と、検証の方法「被爆者の層化」という「石田社会学」の基本原理を開示して、石田忠『統計集<原爆体験の思想化>』(全 7 巻+別巻) の読解に資するところが大きい。ただし、この講義録は、上記”CiNii” によれば、大学図書館の所蔵は、6 大学にとどまる。

(15) 石田忠の人間と学問について、わたしは追悼の小文を地元紙によせた。「石田忠先生を悼む—科学性と人間愛を結ぶ」、『長崎新聞』2011 年 4 月 19 日；拙著『長崎にあって哲学する・完』(2015 年) 104-105 ページ、参照。

以下、「付録」Appendix.

次ページ以下に掲載するのは、日本被団協から刊行された『被爆者の死』の英語版 *The Deaths of Hibakusha*. (2 Vols, 1991)への序文「核なき世界へ」(Toward a Nuclear-Free World) である。翻訳は被団協『「あの日」の証言』英訳グループによる。

## Foreword

### Toward a Nuclear-Free World

**Shinji Takahashi**  
Philosopher

In 1985, commemorating the 40th anniversary of the atomic bombing, Nihon Hidankyo (the Japan Confederation of A- and H-Bomb Sufferers Organizations) conducted a survey of the Hibakusha. The survey was made possible with the cooperation of conscientious social scientists of postwar Japan. The testimonies compiled in, *The Deaths of Hibakusha: The days of the Bombings to the End of 1945*, have been carefully selected from approximately 13,000 responses to the survey.

The Hibakusha tell of the devastating experiences of losing their closest family members and relatives on the day of the bombing and afterwards -- some within the year 1945 and others during the 40 years since then. The readers of the present and succeeding volumes will repeatedly hear in the testimonies of the surviving Hibakusha, the deep personal appeals as well as their urgent demands.

Some of their demands and appeals pertain to situations that are peculiar to Japan; others have more universal application.

For the first ten years after the war, the Japanese Diet and the administration totally neglected the treatment of the Hibakusha, medically or otherwise. It was not until 1957 that the Medical Care Law was enacted for the Hibakusha, and the Law for Special Measures, which included health care allowances, came into effect even as late as 1968. Moreover, the government has persistently refused to compensate or even express condolences on the deaths of the Hibakusha. Quite understandably, many testimonies contained in this volume deplore the paucity of medical and other measures for the Hibakusha, and demand the early enactment of an Hibakusha Relief Law, based on the principle of "state compensation." These are demands that grew out of the particular political situation of postwar Japan.

There are other testimonies, however, that contain messages that touch upon the very essence of human existence and are therefore of universal significance.

Through the analyses of former Hibakusha surveys I have drawn one conclusion. I have come to define the "atomic-bomb hell" as a condition in which one cannot stay human and remain alive at the same time.

From this book and the succeeding volume, we learn that the people who saved others or were in charge of medical and other relief activities often had to die prematurely. In other words, those who stayed human, exactly because of their humanness, could not remain alive. Therefore we realize that the "atomic-bomb hell" long outlasted August 6, 1945 in Hiroshima and August 9 in Nagasaki. It has persisted throughout all the postwar years.

We also find in the testimonies that many Hibakusha are being tormented with



"death anxiety." Closely watching their families and friends suffer and die of "atomic diseases" in utmost pain, they cannot suppress the fear that they may have to go through the same pain. All the Hibakusha, consciously or unconsciously, are thus beset with the "atomic-bomb death" even today.

The average age of the Hibakusha in October, 1985 was 59.9; and would be well over 60 now. Most of the aged Hibakusha are living with the anxiety that death might come at any moment. The "atomic-bomb death," therefore, is increasingly compounded by the "death anxiety," which overwhelms all other human emotions, and casts a dark shadow upon the Hibakusha's future. Such conditions tell us that those atomic bombs are not things of the past, but they continue to dominate the Hibakusha lives and inflict physical and emotional pain upon them.

In order to envision the consequences of a "nuclear holocaust" of the future, we must first use our imagination and reconstruct the "hell" created in the past by the atomic bombs in Hiroshima and Nagasaki. By reading the 1,700 testimonies compiled in *The Witness of Those Two Days* (2 vols. 1989), plus this and subsequent volumes, the readers will be able to picture vividly the human significance of death and survival under the atomic bombing.

Seeing numerous innocent people suffer from the atomic bombs, people at the time could not help asking "why torture these helpless and innocent people?" In this volume, the readers will frequently encounter the same question. Tormenting innocent people is the most outrageous violation of human justice and equity. Since the inherent nature of nuclear weapons is to torture innocent people on an unprecedented scale, human conscience cannot allow the existence of such weapons, if humanity is to retain its conscience, nuclear weapons must be eliminated.

It is my deep conviction as a philosopher that this holocaust (the most cruel death) in the modern world must become the catalyst for the progress of history. The death and survival in Hiroshima and Nagasaki must play the crucial role of pivotal point in history, the point at which the world moves from the nuclear age into the non-nuclear age. In order to achieve this, more people will have to cultivate their "sensitivity to death" anew, and share the conviction that humanity cannot permit an "atomic bomb hell" or "nuclear holocaust."

I hope that this and the next volumes will be read by as many people as possible, and that the readers will take the initiative in creating a nuclear-free world.